

労災かわらばん

2010

—秋号—

Vol.30 発行日/平成22年9月30日 編集/釧路労災病院新聞局

釧路労災病院 開院50周年を迎えて



院長
草野 満夫

釧路労災病院は昭和35年1

月22日に独立行政法人 労働者健康福祉機構の前身である労働福祉事業団の第23番目の病院として、美唄労災病院(現北海道中央労災病院脊損センター)、岩見沢労災病院(現北海道中央労災病院)に遅れること5年、この地に開院しました。当時の病院周囲は釧路湿原で、その真っ只中に建てられました。今年でちょうど50年目を迎え、先般7月30日に記念式典と祝賀会が盛大に開催されました。

式典では、釧路市長、高原北海道労働局長、労働者健康福祉機構の伊藤理事長より祝辞を賜り、引き続き病院の50年間を歩み、宮城島副院長からスライドで紹介されました。祝賀会では第一外科藤堂教授、釧路医師会会長の杉元先生よりご祝辞を頂戴致しました。ご来賓の挨拶に職員一同たいへん励まされると同時に、50年の歴史の重みを厳粛に受け止め、さらに病院を発展させようというあらたな気持ちで湧いてきました。改めてこれまでご指導、ご支援いただきました釧路市内、近郊あるいは釧根、釧網地区の先生方、そして、創立以来、病院をこれまで大きく発展させた功労者である労災病院の

OBである行楽会、元気会の皆様に感謝申し上げます。昔の仲間が沢山参集し、思う存分、旧交を暖めていただけたのではと喜んでおります。ここで簡単に50年を振り返ってみたいと思います。

釧路労災病院は昭和35年、1960年1月に開院致しましたが、1960年、皆さん、おいくつでしたでしょうか? そしてどんな年でしたでしょうか? 私が高校1年の時で、カラーテレビが初めて放映され、相撲世界では若乃花、栃錦、そして大鵬が全盛の時でした。ローマオリンピックが開催された年でした。当然、生まれていなかった方々も多いと思います。開院当時の病院について故新田一雄初代院長は記念誌に「見晴らしはすばらしいが、辺りは何もなく、寒々として荒涼たる湿原の一端に孤高を誇っていた」と記されております。新田先生は私と外科の同門でしたが、あまりお話しする機会はありませんでした。会に出席された行楽会、元気会の先輩の中には新田院長と一緒に働いた方々も多いと思います。中野事務局長のもその一人です。新田院長は仲人を頼まれたら、自分の都合で結婚式の日取りを変えさせたというがあるくらい、大変人情味のある、面倒見がよい、おやじタイプの病院長であったと聞き及んでおります。今日の病院の発展に新田先生の功績を抜きにしては語れません。

開院時は病床数252床、7診療科で、殆どの医師は北大病院から派遣を仰いでおりました。地方都市の宿命として、特に医師確保には困難な環境にありましたが、北大病院、旭川医大病院各医局の厚いご支援によりこれを取り切ることができたことは誠に幸いでありました。交通網の整備・拡充とともに道東地区の開発は急速に進行し、釧路市の発展とともに、医療に対する地域のニーズは急速に加速

釧路労災病院の理念・基本方針

- 【理念】**
最新の知識と技術に基づいた的確で親切的な信頼される医療を実践します。
- 【基本方針】**
1. 最新の知識と技術の習得に研鑽し、安全で質の高い医療を実践します。
 2. 患者さんの視点で、親切的な対応、わかりやすい説明の医療を実践します。
 3. 医療の高い透明性を目指し、情報の公開に努めます。
 4. 検診などの予防医療活動で、地域住民と勤労者の健康づくりに貢献します。

しました。これに伴い、3回の増改築を重ね、平成元年には500床、17診療科となりました。

この間、初代院長の徹底的に無駄を省いた病院運営により確固たる経営基盤が築かれ、これは歴代の市川、奥、内野、院長、副院長に引き継がれ、平成13年に500床、18診療科、各種専門外来をもつ現在の病院に全面増改築されました。道東の中核病院として確固たる基盤を築きまし

たが、その後、新臨床研修医制度の導入により医師不足が加速され、医療費抑制政策、患者意識の変化などで、病院を取り巻く環境は次第に厳しくなってきました。当院も例外ではなく、道東地域における医療機能の集約化による小児科・産婦人科の休診と循環器科・皮膚科診療の縮小など影響を受けております。

前小柳院長はこのような厳しい状況の中でも、大変ご尽力され、宮城島、小笠原両副院長の協力のもと、釧路赤十字病院との連携、いわゆるNR構想を推進するなど、大きな功績を残されました。勤労者医療はもとより、ドクターヘリ受け入れ病院として地域の救急医療も担っておりま

す。さらにはがん診療連携拠点病院の指定を受け、道東のがんセンター的役割を担い、そしてHIVエイズ治療中核拠点病院としての機能も果たしています。

50周年というこの大きな節目を迎えましたが、ここまで発展出来たことはこれまでご尽力された多くの先輩方、関係者の皆様の努力の賜です。今、我々はこのような先人たちが築かれた大きな功績を次の60年、70年さらに50年後の100年目の世代に引き継ぐ大きな役割を担ったことになりました。陸上競技で言えば、リレーのバトンが渡された感じがします。そのバトンは50年の病院の歴史、そのもので

厳しい医療情勢の中、まさに粉骨砕身、地域医療を支えておられる姿に感銘を受けました。我々釧路労災病院は釧路市立病院、日赤病院はじめ市内の基幹病院とスクラムを組んで、このような遠隔地医療を支えている先生方に少しでもお手伝いできるような、さらに医療連携を進めていきたいと存じます。そして地域の中核病院としての役割を果たすために更なる病院機能の充実を図り、これからも地域に必要とされる病院となるべく努力したいとおもいます。患者さんから、診てもらって、心底良かった、また病気になるまで、診てもらって、この病院の患者になりたい、と言われるような病院づくりを目指しております。

この度、開院50周年を迎えることができたことは、私ども病院職員にとつてこの上ない慶びであります。これまで常にご指導、ご支援いただきました北海道大学医学部、札幌医科大学、旭川医科大学はじめ全国大学の先生方、労働者健康福祉機構、北海道及び釧路市の医師会の皆様、そして共に地域医療に担ってこられた北海道並びに釧根、釧網の関係者の皆様のお陰であり、心から御礼申し上げます。

また、今日まで献身的に病院を支えてくださった先輩諸氏および現職員ならびに当院の歴史に関わっていただいたすべての方々に深く感謝申し上げます。

(創立50周年式典での祝辞、祝賀会挨拶より)